國學院大學学術情報リポジトリ

「承る」の解釈：「とはずがたり」の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮腰, 賢 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000935

「承る」の解釈――「とはずがたり」の場合

宮腰　賢

キーワード：承る、とはずがたり、謙譲語、おっしゃる、お聞きする

1

学習辞書である『旺文社全訳古語辞典　第四版』の「うたてやな」の項に引く謡曲・隅田川の用例の「承るべけれ」を「お聞きするはずだ」と訳してあるのは誤りではないか、との指摘があった。新編日本古典文学全集の謡曲集②では、この部分が「おっしゃるのが当然である」との現代語訳がされているし、『旺文社古語辞典　第十版増補版』の「うけたまはる」の項には、「④（目上の人が言うことを、こちらが拝聴するという言い方にしたところから）「言ふ」の尊敬語。おっしゃる。「『…』など御みづからさまざまー・るを」〈とはずがたり〉参考④は中世に散見する用法。」とあるからだという。

中世の「平家物語」「徒然草」「方丈記」などには、「おっしゃる」の意と見られる「承る」に出会うことがないが、「とはずがたり」ではどうか。

2

新編日本古典文学全集47『建礼門院右京大夫集　とはずがたり』（校注・訳　久保田淳）によると、『旺文社古語辞典　第十版増補版』の所引例は、こうある。片仮名ルビは現代語訳による。

またの年の睦月の末に、大宮院より文あり。「准后の九十の御賀のこと、この春思ひ急ぐ。里住みも遥かになりぬるを、何か苦しからむ、打出での人数にと思ふ。准

后の御方にさぶらへ」と仰せあり。

「さるべき御事にてはさぶらへども、御所ざま悪しざまなる御気色にて、里住みしさぶらふに、何のうれしさにか、打出でのみぎりに、参りはべるべき」と申さるるに、「すべて苦しかるまじきうへ、准后の御事は、ことさら幼くより、故大納言の典侍といひ、その身といひ、子にことならざりしことなれば、かかる一期の御大事見沙汰せむ、何かは」など、御自らさまざまうけたまはるを、さのみ申すも事ありがほなれば、参るべきよし申しぬ。（405～406ページ）

見るように、「うけたまはるを」は、「おっしゃるのを伺って」と現代語訳されている。大宮院の「すべて……何かは」との言を受けて、「御自らさまざまうけたまはるを」であるから、この「うけたまはる」は、「御自ら」「おっしゃる」の意に用いているものと見られる。副詞句の「御自ら」があるので、「お聞きする（伺う）」の意には取れない。

この用例には「おっしゃるのを伺って」との現代語訳がなされているが、「うけたまはる」が「おっしゃる」「仰せられる」とだけ訳されている箇所もある。

御車待ちたまふほど、「この世のほかに思ひ切ると見えしより、尋ね来るに」と、いくらも仰せられて、「兵部卿が恨みに、我さへ」などうけたまはるもことわりなれども、なべて憂き世をかかるついでに思ひ逃れたくはべるよし申すに、「嵯峨殿へなりつるが、思ひがけず、かくと聞きつるほどに、例の人づてにはまたいかがと思ひて、伏見殿へ入らせおはしますとて、立ち入らせたまひたり。何と思はむにつけても、このほどのいぶせさも、心静かに」とさまざまうけたまはれば、例の心弱さは、御車に参りぬ。（335～336）

後深草院が二条に「この世の……尋ね来るに」と「仰せられて」、さらに、「兵部卿が……我さへ」など「うけたまはるも」であり、重ねて「嵯峨殿へ……心静かに」とさまざま「うけたまはれば」である。「仰せられて」が「おっしゃって」であり、「うけたまはれば」が「伺ったので」であるのなら、「うけたまはるも」も「伺うのも」でよいのではないか。

（略）具し歩く人もなきにしもあらじ」など、ねんごろに御尋ねありしかば、「（略）紅葉の秋は野もせの虫の霜

にかれゆく声を、わが身の上と悲しみつつ、空しき野辺に草を枕として明かす夜な夜なあり」など申せば、「修行の折のことどもは、心清く千々の社に誓ひぬるが、都のことには誓ひがなきは、古き契りの中にも改めたるがあるにこそ」と、またうけたまはる。（477～480）

後深草院が二条に「……あらじ」などと「御尋ねありしかば」、「……夜な夜なあり」などと「申せば」、「修行の……あるにこそ」と「またうけたまはる」というのである。後深草院の言を受けて、「またお聞きする（伺う）」でよいところである。

ことやうなる姿もなべてつつましければ、急ぎ出ではべりしにも、「かならず近きほどに、今一度よ」とうけたまはりし御声、あらざらむ道のしるべにやとおぼえて帰りはべりしに、還御の後、思ひかけぬあたりより、御尋ねありて、まことしき御訪ひおぼしめしよりける、いとかたじけなし。（481）

ここも、後深草院の「かならず……今一度よ」との言を受けて、「と伺った御声」でよいところである。ちなみに、二条と「有明の月」との交情の場面での「うけたまはりつる御言の葉」の「うけたまはりつる」は「伺った」と訳されている。

例の方ざまへ立ち出でたれば、もしやと待ちたまひけるもしるければ、思ひ絶えずは本意なかるべしとかやおぼえても、ただ今までさまざまうけたまはりつる御言の葉、耳の底に留まり、うち交したまひつる御匂ひも袂に余る心地するを、（358）

3

新編日本古典文学全集47「とはずがたり」によると、先に『旺文社古語辞典　第十版増補版』の所引例を引いたように、「うけたまはる」が「おっしゃるのを伺う」「仰せを伺う」などと現代語訳されている箇所がある。

またいかならむと思ふほどもなく、（略）いと馴れがほに入りおはしまして、「悩ましくすらむは、何事にかあらむ」など御尋ねあれども、御答へ申すべき心地もせず、ただうち臥したるままにてあるに、添ひ臥したまひて、さまざまうけたまはり尽くすも、「いさやいかが」とのみおぼゆれば、（204）

後深草院が二条に「添ひ臥したまひて、さまざまうけたまはり尽くす」というのである。「たまひて」で主体が変わって、二条が「さまざま伺い尽くすのも」「さまざまお聞きし尽くすのも」とは読みにくいのであろうか。

女院の御方へ入らせおはしまして、のどかに御物語ありしついでに、（略）「まことに、いかが御覧じ放ちさぶらふべき。宮仕ひはまた、し馴れたる人こそ、しばしもさぶらはぬは、便りなきことにてこそ」など申させたまひて（オッシャッテ）、「何事も心置かず、我にこそ」など、情けあるさまにうけたまはるも（オッシャルノヲ何ウニツケ）、「いつまで草の」とのみおぼゆ。（266）

後深草院が大宮院のお部屋にお入りになって会話を交わす場面である。大宮院が後深草院に「まことに……にてこそ」などと「申させたまひて」、「何事も……我にこそ」などと「情けあるさまにうけたまはる」のである。大宮院が後深草院に「申し上げなさって」、二条が大宮院の言を「情けあるさまにお聞きする（伺う）」のである。大宮院が「おっしゃり」、その会話文を二条が「お聞きする（伺う）」ということであるが、大宮院が「おっしゃり」の「おっしゃり」にあたる語は用いられていない。

後白河院御八講にてあるに、（略）結願十三日に御幸なりぬる間（ま）に、御参りある人あり。「還御待ちまゐらすべし」とてさぶらはせたまひ、二棟（ふたむね）の廊に御渡りあり。参りて見参に入りて、「還御はよくなりはべらむ」など申して、帰らむとすれば、「しばし、それにさぶらへ」と仰せらるれば（オッシャルノデ）、（略）さぶらふに、何となき御昔語、「故大納言が常に申しはべりしことも忘れずおぼしめさるる」など仰せらるるもなつかしきやうにて（オッシャルノモ）、のどのどとうち向ひまゐらせたるに、何とやらむ、思ひのほかなることを仰せられ出だして（オッシャリダシテ）、「仏も心きたなき勤めとやおぼしめすらむと思ふ」とかやうけたまはるも（オッシャルノヲ承ルノモ）、思はずに不思議なれば、（292～293）

「御参りある人」は、「有明の月」と称される人物。その人物が二条に「故大納言が……おぼしめさるる」など「仰せらるる」、さらに、「思ひのほかなることを仰せられ出だして」、「仏も……と思ふ」とかや「うけたまはるも」なのである。「有明の月」が「仰せられ出だして」、その「仏も……と思ふ」とかやの言を二条が「お聞きするのも」と読

んで不自然ではない。

つくづくと案ずれば、一昨年（をととし）の春三月十三日に、初めて、「折らでは過ぎじ」とかやうけたまはり初めしに、（324）

この例も、「有明の月」の「折らでは過ぎじ」とかやの言を二条が「うけたまはり初めしに」というのである。「初めてお聞きしたが」と読んで、不自然ではない。

（略）不思議なることさへあるなれば、この世一つならぬ契りも、いかでかおろかなるべき。『一筋（ひとすぢ）に我撫でおほさむ』とうけたまはりつるうれしさも、あはれさも、限りなく。（略）」など、泣きみ笑ひみ語らひたまふほどに、（368）

この例は、「有明の月」が二条に「……不思議なる……限りなく……」など、「語らひたまふ」言の中に、後深草院の言の『一筋に……撫でおほさむ』が引かれているものである。「うけたまはりつる」は、「有明の月」が「お聞きした」で、不自然ではない。(1)

4

その一斑を見たが、「おっしゃるのを伺う」「仰せを伺う」などと現代語訳されている「うけたまはる」の中で、よくはわからない用例がある。(2)

露消え果てたまひし御事の後（のち）は、人の咎、身の誤りも心憂く、何心なくうち笑みたまひし御面影の、違（たが）ふ所なくおはせしを、忍びつつ出でたまひて、「いとこそ、鏡の影に違はざりけれ」など申しうけたまはりしものをなどおぼゆるより、悲しきことのみ思ひつづけられて、慰む方なくて明け暮れはべりしほどに、（263～264）

後深草院と二条との間にできた皇子が亡くなったあとの場面である。皇子の「何心なくうち笑みたまひし御面影」が後深草院と「違ふ所なくおはせしを」、皇子を引き取ってお世話していた二条の母方の祖父四条隆親大納言邸に後深草院がこっそりとおいでになって、「いとこそ、鏡の影に違はざりけれ」などと「申しうけたまはりしものを」だというのである。

この「申しうけたまはる」は、「とはずがたり」には、二条と遊義門院との歌の贈答の箇所のあとにも用いられている。

京に上りて、御文参らすとて、「さても、花はいかがな

りぬらむ」とて、

花はさてもあだにや風のさそひけむ契りしほどの日数ならねば

御返し、

その花は風にもいかがさそはせむ契りしほどは隔てゆくとも

その後（のち）、いぶせからぬほどに申しうけたまはりけるも昔ながらの心地するに、（528）

ここの現代語訳に見るように、二条から遊義門院に申し上げ、二条が遊義門院からお聞きするというのである。

管見に入るものでは、『義経記』巻八にも、「この基成は、判官殿に浅からず申し承り給ひけり。」（新編日本古典文学全集62『義経記』 446ページ）とある。基成から判官に申し上げ、基成が判官からお聞きするというのである。

これらの類例に照らしても、先の「いとこそ、鏡の影に違はざりけれ」などと「申しうけたまはりしものを」の箇所はわからない。あるいは、「うけたまはり」が拙論2で触れた「御自らさまざまうけたまはるを」の「うけたまはる」と同じく、「おっしゃり」の意で用いたものかとも思われようが、そうだとしても、「申し」がわからない。

5

以上見たように、「とはずがたり」には、「おっしゃる」の意に用いた確かな用例が一例ある。上位者の会話または手紙文を「と・など」などで受けて、「うけたまはる」とある用例は、「おっしゃる」または「おっしゃるのを伺う」と訳すほうが現代語としてはわかりやすい。確かな一例があるから、それに準じて、「うけたまはる」が尊敬語に転じていると解釈することも可能であろう。だが、この作品では、尊敬語「おっしゃる」意の「仰せあり」が三十二例ほど、「仰せらる」が六十九例ほど、「のたまはす」が一例用いられ、謙譲語「お聞きする」意の「うけたまはる」が――「おっしゃる」「おっしゃるのを伺う」などと現代語訳されるものを除いても――四十九例ほど用いられている。

○御物語ありて、神路の山の御物語など、絶え絶え聞こえたまひて（申シアゲラレテカラ）、「今宵はいたう更けはべりぬ。のどかに、明日は嵐の山の禿（かぶろ）なる梢どもも御覧じて、御帰りあれ」など申させたまひて（申サレテ）、わが御方へ入らせたまひて、いつ

しか、「いかがすべき、いかがすべき」と仰せあり。(268)
○御所の御土器を大納言に賜はすとて、「この春よりは、たのむの雁もわが方によ」とて賜ふ。ことさら畏まりて、九三返したまひてまかり出づるに、何とやらむ、忍びやかに仰せらるることありとは見れど、何事とはいかでか知らむ。(195～196)
○更けぬれば、御前なる人もみな寄り臥したる。御主も小几帳引き寄せて、御殿籠りたるなりけり。近く参りて、事のやう奏すれば、御顔うち赤めて、いと物もの たまはず、文も見るとしもなくて、置きたまひぬ。(269)
確かな「おっしゃる」意の「うけたまはる」は、尊敬語に転じたというより、「とはずがたり」の語り口の特異さによるものと見るほうがよくはないか。

6

新編日本古典文学全集59『謡曲集②』(校注・訳　小山弘志　佐藤健一郎)によると、「承る」を「おっしゃる」と現代語訳する箇所が散見する。その一斑を引く。片仮名ルビは現代語訳による。音曲の変化を示す符号は省く。

「これなる物狂をよくよく見候へば、古里の母にて御入り候。恐れながらよそのやうにて、問うて賜り候へ。
「これは思ひも寄らぬ事を承り候ふものかな。やがて問うて参らせうずるにて候。
(百万　24ページ)

この曲には、次のようにもある。
「さて今も子といふものあらばうれしかるべきか。
「仰せまでもなしそれ故にこそ乱れ髪の、遠近人に面をさらすも、
(25)
尊敬語「仰せ」と謙譲語「承る」とは、言い分けられていると見てよい。
「これなる物狂の国里を問うて賜り候へ。
「これは思ひも寄らぬ事を承り候ふものかな。さりながら易き間の事尋ねて参らせうずるにて候。
(三井寺　44)

この曲には、「さりながら三位殿のあのやうに言はるるによつて」(36)、「三位殿の何と仰せられうとままよ」(36)、「あら不思議や、今の物仰せられつるは」(44)ともあって、やはり、「仰せらる」と「承る」とは、言い分けられてい

ると見られる。

「手を擦るなどと承り候ふほどに、参らせうずるにて候。（自然居士　164）

この曲には、「げに面白くも述べられたり」（156）、「説法には道理を述べ給ふ」（156）、「委細承り候」（158）などもあり、尊敬表現の「述べらる・述べ給ふ」と謙譲表現「承る」とは、言い分けられていると見られる。

さて、「隅田川」には、こうある。

「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。かたのごとくも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも、覚えぬ事な宣ひそよ。（53）

シテの梅若丸の母がワキの渡し守に言うせりふである。現代語訳では、「承る」も「宣ふ」も「おっしゃる」になっているが、原文では言い分けているのだから、「承る」は「お聞きする」、「宣ふ」は「おっしゃる」でよいところではないか。

なお、「弱法師」には、「うたてやな難波津の春ならば、ただこの花とこそ仰せあるべきに、今は春べも半ばぞかし」（141）ともあって、同じようなせりふまわしであっても、「仰せある」を用いることもある。

現代語訳では、「承る」に「おっしぉる」をあてることがあるものの、「お聞きする」の意にとって不自然になる用例は、謡曲には、見当たらない。

7

現代日本語でも、話し手主体のA、聞き手主体のBの表現が生きている。

A「明日、午前十時に到着します。」と、おっしゃいました。

B「明日、午前十時に到着します。」と、承りました。

いささかわかりにくいにしても、「承る」は「お聞きする」であるとして、謡曲などの中世の古典を読むほうがよくはないか。「とはずがたり」に「おっしゃる」の意に用いた確かな用例が見られるからといって、広く、他に及ぼすまでもあるまい。

注（1）説明を加えなかった「おっしゃるのを伺う」「仰せを

伺う」などと現代語訳されている「うけたまはる」の用例は、以下のとおり。

○さて、いつしかあらはへ出でさせおはしまして召すに、参りたれば、「玉川の里」とうけたまはるぞ、よそも悲しき。（305）

○夜もすがら、「わが知らせたまはぬ御事、またこの後もいかなることありとも、人におぼしめし落とさじ」など、内侍所・大菩薩引き掛けうけたまはるも畏ければ、参りはべるべきよしを申しぬるも、（336）

○（略）我深く思ふ子細あり。苦しかるまじきことなり」とねんごろに仰せられて、「何事にも、我に隔つる心のなきにより、かやうに計らひ言ふぞ。いかがなどは、かへすがへす心の恨みも晴る」などうけたまはるにつけても、いかでかわびしからざらむ。（354～355）

○かかる病に取り籠められたるよし申したる御返事に、「面影をさのみもいかが恋ひわたる憂き世を出でし有明の月　一方ならぬ袖の暇なさも推しはかりて、古りぬる身には」などうけたまはるも、ただ一筋に有明の御事をかく思ひたるも、心づきなしにや、（394～395）

○父の生所を祈誓申したりし折、「今生の果報に代ゆる」とうけたまはりしかば、（433）

○「なかなか人の見るも目立たし。内へ入れ」と仰せある御声は、さすが昔ながらに変らせおはしまさねば、こはいかなりつることぞと思ふより、胸つぶれてすこしも動かれぬを、「とくとく」とうけたまはれば、なかなかにて参りぬ。「ゆゆしく見忘られぬにて、年月隔たりぬれども、忘れざりつる心の色は思ひ知れ」などより始めて、昔今のことども、移り変る世のならひあぢきなくおぼしめさるるなど、さまざまうけたまはりしほどに、寝ぬに明けゆく短夜は、ほどなく明けゆく空になれば、「御籠りのほどはかならず籠りて、またも心静かに」などうけたまはりて、立ちたまふとて、御肌に召されたる御小袖を三つ脱がせおはしまして、（460）

○「同じ袂なつかしく」など、さまざまうけたまはりて、いはけなかりし世のことまで、数々仰せありつるさへ、さながら耳の底に留まり、（462）

○いまだ二葉にて明け暮れ御膝のもとにありし昔より、今はと思ひ果てし世のことまで、数々うけたまはり出づるも、わが古事ながら、などかあはれも深からざらむ。「憂き世の中に住まむ限りは、さすがに憂ふることのみこそあるらむに、などやかくとも言はで月日を過ぐす」などうけたまはるにも、「かくて世に経る恨みのほかは、何事か思ひはべらむ。その嘆き、この

思ひは、誰に憂へてか慰むべき」と思へども、申し表すべき言の葉ならねば、つくづくとうけたまはり居たるに、（476）

○御素服召さるるよしうけたまはりしかば、昔ながらならましかば、いかに深く染めまし。後嵯峨院御隠れの折は御所に奉公せしころなりしうへ、故大納言、「思ふやうありて」とて御素服の中に申し入れしを、「いまだ幼きに、大方の栄えなき色にてあれかし」などまでうけたまはりしに、（509）

注（2）　平成二十九年度國學院大學国語研究会前期大会研究発表（平成二十九年七月一日）の場で、「おっしゃる」意の「うけたまはる」かと大久保一男氏のご指摘の用例。